

主任司祭との話し合い(2007年2月22日)

ベネディクト16世は四旬節の始まりに当たって、ローマ教区の司祭たちとの集まりをもった。

1, 最初の質問は、Castel di Levaの「神の愛の聖マリア巡礼所」の主任司祭が、ローマ司教区で最も親しまれている聖母の巡礼所の使命をいかに効果的に果たすことができるかというものであった。

まず第一に申し上げたいことは、今私はローマ教区という偉大な教区の司教であると実感し余転びに浸っているということです。司教代理の枢機卿様が、あなたたちは光と慰めを求めていると言われました。正直に打ち明けますが、幅広い世代に属するこれほど多くの司祭を目の前にすることは、私には光であり慰めです。すでに最初の質問から私は学ばせてもらいました。学ぶこと、これもこの集まりの基本的な要素だと思っています。この場において、私は主任神父様たちの生きた声や、司牧上の経験を聞くことができ、それによって私は皆さんの直面する問題や困難や経験といった具体的な状況を知ることができるのですから。それらを抽象的な仕方では想像するのではなく、小教区教会の現実の生活との具体的な会話の中でそれらを追体験することができるのです。

では最初の質問にお答えします。神父様はこの巡礼所で何ができるかという質問についてすでにご自分で答えを出されたと思います。この聖母の巡礼所がローマで最も愛された場所であることは存じております。私自身、色んな機会にこの伝統ある巡礼所を訪れた際、ここにしっかりした信心が根付いていることを肌で感じました。様々な世代の人々がそこで祈っていることが感じられ、聖母が母として人々を見守っておられることが見えるようです。苦しみや困難や希望や、そして喜びも抱えて聖母のもとに馳寄る老若男女を見ると、古くからのマリア信心がしっかりと保持されていることが分かります。ですから、この巡礼所はローマ教区にとって本質的な要素なのです。巡礼所というものが普遍教会にとって信仰と命の源泉であるという事実は今日ますます明らかになっていますが、ローマ教区にとっても同じです。私の故郷で、国民的な巡礼所 Altotting に歩いていく巡礼をしたことがあります。それは偉大な大衆による宣教とも言えます。なかでも多くの若者が巡礼に参加しています。徒歩で三日の道のりですが、祈りと良心の糾明の雰囲気の中で歩いていくと、信仰を再発見するに至ると言っても大げさではありません。この三日の巡礼は和解と祈りの日々、聖母と神の家族、そしてご聖体に本当に至る道のりです。聖母に向かって歩いて行き、そして聖母とともに主に向かいます。赦しの秘跡によって内的に刷新され、ご聖体におられる主に相応しい形で出会うのです。(略)

質問に戻りますが、巡礼所は祈り、告白し、ミサを捧げる場として、現在ローマ教区の中でも教会のために大きな奉仕をしていると断言しましょう。それゆえに、私の考えですが、神父様が具体的にお話しになった本質的な奉仕とは、まさに巡礼所を祈りの場、秘跡執行の場、愛徳の行われる場とすることではないでしょうか。私の理解が正しいなら、神父様は祈りの四つの側面をお示しになりました。第一の面は個人的なものです。この面に関して聖母が私たちのよき教師です。聖ルカは聖母について二度ほど「これらすべてのことを心に留め、思いめぐらしていた」(2章、19,51)と言っています。聖母は絶えず神との対話をし、神の御言葉だけでなく、神がそれらを通じて語りかけられた出来事にいつも注意を傾けておられたのです。「マグニフィカット」は、聖母がどのような仕方でも絶えず神と語り合っておられたかを教えます。言うまでもなく、キリストと一緒に生活しておられた間、聖母はいつもキリスト、すなわち神の御子と、そして三位一体の神と話しておられたのです。ですから、聖母から学びましょう。主と個人的にお話することを、神の御言葉を私たちの生活と心の中に留め

て思いめぐらすことを。それは御言葉が私たち一人一人にとって真実の食べ物となるためです。聖母は祈りの学舎に私たちを導かれ、神と深く個人的な付き合いをお教え下さいます。

二つめの面は、典礼的祈りです。典礼において主は私たちに祈りを教えられます。最初にご自分の言葉を与えて下さり、次にミサを通じて私たちをご自分の生涯、死と復活の神秘の中に入り込ませて下さいます。聖パウロは「私たちはどう祈るべきかを知らない」(ローマ、8章、26)と言っています。私たちはどう祈るべきか、何を神に申し上げるべきかを知らない、と。そのために、神は私たちに祈るための言葉をお与えになりました。詩編において、また聖なる典礼、ミサの偉大な祈りにおいて。こうして祈り方を教えて下さるのです。聖霊の靈感の下に何世紀の間に作られてきた祈りの中に私たちは導入され、キリストが御父となさる対話に一致するのです。ですから、典礼は何よりも祈りです。答唱詩編でも、教会の祈りでも、また素晴らしいミサの奉献文でも、まず私たちは聞き、そして答えるのです。もし私たちがキリストの神秘、ならびに御父と御子の対話に一致しながら、「祈る人」の態度をもって捧げるならば、よくミサを捧げていると言えるでしょう。そうしてこのようにミサを捧げるなら、(略)人々は私たちの祈りを通して神の子の共同体に近づくでしょう。

第三の面は民衆の信心です。典礼秘跡省の一つの重要な文書がこの民衆の信心を扱い、いかに「導くか」を指示しています。民衆の信心は私たちの宝の一つです。と言うのは、それは人々の心に深く根付いた祈りだからです。教会から幾分離れた生活をしていて、信仰について十分な理解をしていない人々でも、これらの祈りによって心を動かされることがあります。これらの信心の行為を「照らし、その伝統を「浄化」することだけで、教会の生き生きとした祈りにすることができるでしょう。

その次に聖体礼拝があります。この信心の業が絶えず刷新されていることにとても感謝しています。聖体に関するシノドゥスの間、司教たちは自らの経験を紹介し、いかにこの礼拝(その中には徹夜の礼拝も含まれています)によって自分たちの共同体が信仰生活を活性化させたか、そしてまたいかにここから新しい召し出しが生まれたかを熱っぽく語りました。近いうちに聖体に関するシノドゥスの結論をまとめた「勧告」にサインをし、教会で活用して頂くことができると思います。それはまさに黙想のための資料と言えます。ミサのためだけでなく、個人的黙想や説教の準備のためにも役立つでしょう。

最後に、神父様は巡礼所が「愛徳」の場であると言われました。このことは私にはすこぶる当然のことで、かつ必要なことと思われます。先日、私は聖アウグスティヌスの『告白録』の第十巻を読み直しましたが、聖人はそこで大体次のように言っています。「観想生活に閉じこもり、孤独の中であなたとだけいたいと考えていたことは誘惑だったとわかりました。あなたはそれを禁じ、『キリストはすべての者のために死に給うた。それは生きる人々がもはや自分のために生きることなく、自分たちのために死んで下さった方のために生きるためである』という聖パウロの言葉を聞かせて下さいました。私は観想生活の中に閉じこもることはできない。あなたはすべての人々のために死んで下さったのですから、私もすべての人々のために生き、愛徳の業に生きなければならない」と。真実の観想生活は愛徳の業に現れます。ですから、私たちが本当に祈ったのか、本当にキリストと出会ったのかは、私たちが「隣人のために」働いているかどうかでわかります。主任司祭はかくあるべきです。聖アウグスティヌスは偉大な主任司祭でした。「私はいつも神の御言葉を聞き、黙想しながら生きることを望んでいた。しかし、現実には、毎日毎日、毎時間毎時間、私は教会の門に立って、悩める人を慰め、貧しい人を助け、言い争いをしている人たちを諫め和解させるなどの仕事に当たらねばならない。」聖アウグスティヌスは、主任司祭のすべきすべての仕事をここで挙げていると言えます。と言うのは、あの時代には司教は、ちょうどイスラム諸国におけるカーディー(裁判官)のような存在で、口論す

る人々の仲介までしなければならなかったのです。とういわけで、観想的人間であったアウグスティヌスは、自分にとって胃の痛くなるような生活を送らねばならなかった。しかし、その中でこの真理を理解したのです。「この生活の中で、『隣人のために』働くことによって、私はキリストと一緒にいる。十字架に死に復活されたキリストの中にいる」という真理です。

この模範は司教と主任司祭にとって大きな慰めではないかと思えます。「隣人のために」働いているがために、観想のためにほとんど時間がないとき、私たちは主とともにいるのです。神父様は愛徳の他の具体的な要素についてお話しになりました。それらも同様に重要なものです。それらはまた、私たちの社会、なかでも子供たち、高齢者の人々、苦しむ人々にとって印です。それゆえに、祈りのこれらの四つの面を見ることによって、「我らの巡礼所で我らは何をするべきか」というご質問にご自分で答えを出されたのではと思えます。

2、教区の青年の司牧を担当している司祭が、若者に信仰の喜びを伝える仕方について質問した。なかでも現在の反キリスト教的文化の潮流の中で、男女の青年がキリストと出会うように手助けするために特に努力を傾けるテーマを示して欲しいと頼んだ。

神父様が若い人々のためにしておられるお仕事に感謝いたします。青年たちが神から離れた世界に住んでいるために、私たちの司牧の仕事において彼らを第一に優先するできであるとみな考えていることでしょう。現代の文化の中で、キリストと出会い信仰生活を生きるのは至難の業と言えましょう。若者たちがこの道を見つけるためには、誰かにしっかりと付き添ってもらうことが必要です。私は残念ながら彼らとはかなり遠くに離れた生活をしており、そのため具体的な細かい指針を与えることはできませんが、敢えて言いますと、第一の要素はまさになによりも「一緒にいること」だと考えます。彼ら自身が、この時代にも信仰を生きることが可能であること、つまり信仰を生きることは過去の事ではなく、今日もキリスト教徒として生活し本当に幸せを見出すことが可能であると肌で感じるという経験が必要です。

聖チプリアヌスはある著作の中に自分の経験を書き残したことが頭に浮かびます。聖人は大体こう言っています。私はこの世界の中で神からまったく離れた生活をしてきた。と言うのは、神々は死んだ者であり、唯一の神は目には見えないと考えていたからだ。そしてキリスト信者を見て、こう考えた。彼らの教える生活を実行することは不可能だ。この世界でそういうふうには生きることができない、と。しかし後に、彼らの何人かと知り合いになり、一緒に過ごし、要理を勉強し、改心の道を進んでいくうちに、少しずつ分かってきた。これは実行可能なのだ、と。そして今、私は幸福を発見してとても満足している。以前の生活は本当の幸せではないことを発見した。いや実は、以前からあれは本当の幸福ではないことと心の中では気づいていた、と。

私の考えでは、若者たちが、キリストの教えを生きることは実行可能であり理性的でもあるということから自らの姿をもって教えてくれる人（自分と同世代の人であろうが、年配の人であろうが）を見つけることがこの上なく重要であると思えます。実行可能であることと、理性的であるということについて、それを疑う人は少なくありません。実行は困難だ、なぜなら世間一般に見られる生活スタイルはキリスト教的な生活とはかけ離れているので。理性的ではない、なぜなら、一見するだけでは、科学は信仰の教えることとまったく違うことを教え、それゆえ理性を通して信仰に近づくのは不可能で、また信仰は現代の文化とは相容れないと考えられるからです。

ですから、第一のステップはまず信仰生活の体験をもつことです。その後で深い信仰の知識に至る

ことができるでしょう。この意味で、「洗礼志願期」において信仰生活は可能であるという事実を体験するように生きることは非常に重要です。一定の経験がなければ、理解に至るのは困難です。パスカルが信者でない友人にした忠告を思い出します。信者がしていることを自分でも試してみなさい。その後で、その経験があれば、すべてが理屈に合っていて真実であると分かるだろう、と。

もう一つの重要な面は、まさに今、この四旬節が教えてくれます。私たちはいきなりキリスト教的生活を完璧な形で、疑いも罪もない形で生きることはできません。私たちはまだ道の途中にあり、多くのことをまだ学ばねばならないし、学ぶことができること、また少しずつ改心を重ねていかねばならないことを認める必要があります。なるほど根本的な改心は一度なされたらずっと続くべきものです。しかし、その改心を実現していくのは一生を掛けてする仕事です。(略)。私たちは一度に完全なキリスト教徒になることはできないと認めねばなりません。しかしながら、前進する価値があり、人生の基本的選択といえるものに忠実でありつつ、時には困難に遭遇する改心の道をねばり強く歩み続ける価値があるのです。実際、落胆に襲われ、すべてを白紙に戻し危機的状况に留まる可能性もあります。簡単にあきらめるのではなく、勇気を奮い起こしてもう一度始めることです。主が私を導いて下さる、主は寛大に赦しを与えてくださるのだから、私も隣人に寛大になるよう努めようと言って前進するならば、本当に隣人を愛しキリスト教的に生きることを学びます。その生活は頑固に道を進むことにあるのですから。

大きな諸問題に関しては、神を知ることが重要だと言いたいです。「神」の問題は本質的です。聖パウロは『エフェソ人への手紙』で「だから心に留めておきなさい。あなたがたは以前は神を知らず希望も持たないまま生きていました。しかし、以前は遠くに離れていましたが、今やキリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです」と言っています(2章、11~13)。こうして人生は私にとって意味のあるものとなり、いかなる困難にも押しつぶされることがなくなる。それゆえに、創造主たる神に戻り、次に神の生ける顔であるキリストに戻る必要があります。このことには相互関係があります。つまり、目に見える姿で歴史の中に現れたイエスに出会うことは、少しずつ神を知るように助けてくれます。逆に神を知るとは、神の御顔であるキリストの神秘の偉大さを理解することを助けてくれるのです。キリストが単なる預言者や偉大な宗教家の一人ではなく、神の御顔、神であることへの理解に至ったときに初めて、キリストの偉大さを発見し神に出会うこととなります。神とは、遠いところに存在する影のような「第一原因」ではなく、顔をもった存在である。その御顔は慈悲に富み、赦しと愛の顔、私たちと出会うことを望んでおられる顔です。ですから、神とキリストという二つの問題は、切り離すことができず、いつも一緒に考えるべきものです。

その他に、私たちは教会というものが私たちの進む道における偉大な同伴者であることを理解する必要があります。教会の中で、神の御言葉は生き生きと保たれ、キリストは過去の過ぎ去った存在ではなく、現在も私たちと一緒におられる存在となるのです。それゆえに、私たちは秘跡を再発見しなければなりません。赦しの秘跡、ご聖体、新しい誕生である洗礼を。聖アンブロシウスは、復活の徹夜祭に洗礼志願者への最後の教えの中で、「私たちは今までは道徳について話してきましたが、今は秘儀について話すときです。(略)。思うに、今夜この二つのことは相互に関わり合う。キリストとともに歩む道は、秘儀の深みに導くからです。こうしてキリスト教的に生きることを学び、赦しの偉大さを学び、聖体においてご自分を私たちにお与えになる主の偉大さを学ぶのです、と。

この道を歩む私たちに、聖人たちも付き添ってくれます。聖人たちは、山のような困難に遭遇しながらもキリスト教的に生きた、聖書の教えを正しく「解釈」した模範です。私たち一人一人は、自分がどのようにすればよりキリスト教的生活を送れることができるかを学べる聖人を持っています。な

かでも現代に生きた聖人たちはそうです。そして、言うまでもないことですが、御言葉の母であられる聖母マリアがおられます。マリアを発見することは、キリスト教徒として前進し御子を知るために大いなる助けとなるでしょう。

3, ガンファローネの聖ルシア教会の主任司祭が、自分の教会の信者たちがワルドー派の共同体と一緒にしている聖書の通読についての経験を語った。小教区の中で神の御言葉がもつ価値はいかなるものか、また聖書の知識が共同体をエキュメニズムに導くようにもするためにはどうしたらよいかを質問した。

神父様ご自身が、二つめの質問に関してより生きた経験をお持ちです。最初に、次に開かれるシノドゥスのテーマは神の御言葉であることをお知らせしましょう。私はすでにシノドゥスの委員会が準備した議案書を見ましたが、教会における聖書の存在を様々な次元からよく提起されてあると思います。

聖書は全体として見ると、なにか壮大な建物のようで、少しずつ発見していかねばならないものです。と言うのは、もし聖書を部分的にだけ見るなら、それが神の御言葉であることを理解することが困難になることもしばしばです。例えば、パレスチナに住んでいた他の民族の絶滅を命じられる旧約聖書の部分や、ちょうど今日私たちが聖務日祷で読んだ「コヘレットの書」も、部分的に読むと、何か世界には希望がないと教えているように思われます。知者も最後には愚か者とともに死んでしまうのですから。

そこで、第一の点はまさに聖書を一つの統一された全体として読むことだと思います。一つ一つの部分が集まって一つの道を形作っているので、部分を全体の中で捕らえるとき、或る部分は別の部分を説明していることが分かります。「コヘレットの書」を例にとりましょう。古い時代には、正しい人は幸せに生きる、つまり神は善人に報いをお与えになるというのが智恵の教えでした。その後、「ヨブ記」が書かれ、現実はそのよう簡単ではないことを教えます。なんと、正しい生き方をする人が苦しんでいるではありませんか。正しい人が神に忘れられたかのように見えるのです。その時代の「詩編」には、いったい神は何をされるのか。無神論者や傲慢な者たちがこの世を謳歌し、まるまると太って私たちをあざ笑っている。神はどこにおられるのか、私たちに目をお向けにならない、私たちは屠殺所に連れて行かれる小羊のように売られてしまった。神よ、あなたは私たちに何をなさるのですか。どうしてこんなことになるのですか、と。そうして「コヘレットの書」がだめを押します。「しかし、これらの智恵もすべて最後にはいったいどこに残るのだろうか」と。これは、すべてがむなしいと断言する実存主義哲学の書物のようです。しかし、これらの書物の考察は価値を失うのではなく、新しい展望に開かれています。その展望の最後には「神の聖なるお方」であるキリストの十字架に導かれるのです。十字架が（義人の苦しみの謎を解く）終着点です。まさにここで神の智恵が示されると、聖パウロは指摘しています。

ということで、聖書の各部分を一つの道に徐々につながっていく道として読んでいくなれば、聖書を全体として読むことを学び、聖書の豊かさとしも美しさも本当に把握することになるでしょう。（略）。近代の聖書学はこの点に関して大きな助けとなるでしょう。例えば、「イザヤ書」の場合ですが、研究者たちが同書の40章以降は異なる著者、第二イザヤの手になると発見したとき、カトリックの神学界には激震が走りました。

ある人たちはこれでイザヤ書が破壊されてしまうと危惧しました。53章の神のしもべの歌は紀元

前800年に生きたイザヤのものではなくなってしまうからです。どうしよう、と彼らは戸惑いました。今では、イザヤ書全体が、オリジナルの書が繰り返し読み直され、最初に示された神秘の理解を深めていき、最初からあったがまだ閉じられていた神秘のすべてを段々と開いていった結果成立した書物であることを知るに至りました。

(略) 絶えず読み返すこと、すでに言われたことを何度も理解し直すことです。そうすれば少しずつ光が強くなっていき、キリスト信者は、主がご自分についてのすべての預言者をエンマウスの弟子に説明しながら言われたことを理解することができます。主が私たちに最後の解釈を示されます。キリストがすべてを解く鍵ですから、私たちはエンマウスの弟子たちと一緒に歩むことによるのみ、つまりキリストと一緒に歩むことによるのみ、十字架につけられ復活されたお方の光を受けて、聖書の豊かさとしさを味わうことができます。

こういう理由で私は重要な点は聖書をばらばらにしないことだと言いましょ。まさに近代の批判学は、聖書は絶えず前に進む道であると教えてくれました。私たちも聖書が一定の方向に向かう道であり、キリストが終着点であることを理解できます。キリストから始めて、道を再び歩み出し、御言葉の深みに入っていくこともできるのです。

まとめてみますと、聖書は常にキリストの光の下に読まれねばならないと言えましょ。ただこうしてのみ、現代のメンタリティーの中でさえ、聖書を読み理解することができ、そこから本当に光を得ることができるのです。私たちが聖書が一つの方向に向けられていることを理解せねばなりません。終着点を知っている者は、いつでも再び道を歩み始め、こうしてより深い仕方でキリストの神秘を学ぶことができるのです。これを理解すれば、聖書がもつ教会的性格をも理解できます。と言うのは、これらの歩みは同時に一つの民の歩みでもあるからです。それは前進する神の民の歩みです。神の御言葉を本当に所有している者はいつも聖霊に導かれる神の民です。聖霊の靈感の働き方は複雑です。聖霊が導き、民は受けるのです。

すなわち、それは一つの民の道、神の民の道です。聖書は注意して読まねばなりません。しかし、生きる神の民である教会の中で、歩みを続けるときにのみできることなのです。(略)

ということで、相互に関係のある三つの次元があることに注意しましょ。歴史的次元、キリスト的次元、教会 旅路にある民 的次元の三つです。聖書を完全に読むためには、この三つの次元がのこらず見られねばなりません。この意味で、典礼 神の民と一緒に祈りながら読書をする ことは依然として御言葉を理解するために特別の地位を占めています。なぜなら、まさに典礼において、聖書の読書は祈りとなり、ミサの奉献文の祈りでキリストの祈りと一致するからです。

もう一つ付け加えたいことがあります。それは教会の教父たちが一人残らず強調していることです。なかでも聖エフレムと聖アウグスチヌスの美しい文章が思い出されます。そこでは次のように言われています。もしあなたが少ししか理解できなかったとしても、それを受け入れなさい。全部理解できなかったなどとは考えないように。御言葉はいつもあなたが理解できたことより無限に偉大なものだ、と。これと同じことを近代の聖書学者の一部に言わねばなりません。この人たちは、自分たちはすべてを理解した。それゆえ、自分たちの研究の後には、もう何も言うことは残っていないと考えています。しかし、それは真実ではありません。御言葉は、教会の教父たちの解釈をも、また近代の高等批判をも大きく凌駕します。これらの解釈は、聖書の一部しか、いや正確に言うと、ほんの小さな一部しか理解できないからです。このことは私たちにとっては大きな慰めです。私たちがほんの一部しか理解できなかったと知ることは嬉しいことではありませんか。それは、無尽蔵の宝がまだまだ発掘されずに残っていて、新しい世代が新しい宝を発見し、神の御言葉の偉大さを味わうのですから。神の御言

葉は、いつも私たちの先を行き、私たちを凌駕します。この確信をもって聖書は読まれなければなりません。

聖アウグスチヌスはこう言っています。ウサギもロバも同じ泉から飲む。ロバはウサギよりも多くの水を飲むが、どちらも自分の能力に従って飲む。私たちは自分がウサギであろうがロバであろうが、感謝の気持ちで一杯だ。主がご自分の水を飲むことを許してくださったからだ、と。

4、この質問は教会の中で生まれる運動や新しい共同体についてである。それらは我々の時代にとって摂理的な賜であるが、それらが普遍教会の一致の中で発展するために、いかにして教会の中に組み入れるべきかを尋ねる。

少し早くお答えしなければ時間がなくなってきましたね。この質問をして下さったことに感謝します。私が教会の中の諸運動について言うべきすべてのことの基本的な参考文献を、神父様は引用されたと言えます。この意味で神父様の質問は、すでに答えになっています。

最初にお話ししたいのは、私はここ数ヶ月の間イタリアの司教様方の Ad limina をお受けしており、そのおかげでイタリアの教会地図を少しよく理解できたということです。誰もがよく知っている諸々の問題とならんで、素晴らしい沢山のことを知りました。なかでも、イタリア人の心にまだ信仰が深く根を張っていることを知りました。もちろん、信仰は今日の状況では様々な面で脅かされていることも確かですが。その他に、諸運動が私の牧者としての役割を受け入れていることも知りました。諸運動に関しては、それに対して批判的で、それらが教会の中に入ることは困難だと言う人々もいます。現実には複雑で、個々の状況を個別に見ないといけないでしょう。

神父様がお話しになった二つの原則を念頭に置かねばならないと思います。最初の原則は、聖パウロがテサロニケの教会に言っている「霊の火(カリスマ)を消してはならない」ということです。もし神が新たな賜を下さるなら、たとえそれが我々にとって時には煙たいものであっても、感謝して受けねばなりません。教会の中で、教会の当局の知らないところで、新しい生活様式が、いわば下から、とは言え実際はいと高きところから、すなわち聖霊の賜として、生まれることは感嘆すべきことです。また、教会の歴史を顧みると、それはいつも起こっていたことです。

新しい運動というものは、いつも初めは他の人々にとって居心地の悪いものです。アッシジの聖フランシスコもそうでした。教皇にとって、その運動に法律的な枠組みを与えることは難しい仕事でした。なぜなら、その運動の内容は、法律的原則を大きく超えたものだったからです。聖フランシスコにとっても、自己の計画をこの法的枠組みにはめ込まれるままにすることは非常に辛いことでしたが、それを受け入れることによって、現在もまだ存在し、そして将来にも豊かな活動を続け、教会に力と新しい要素を与える組織ができたのです。

言いたいのは、このことです。つまり、どの時代にも運動というものが生まれてきたということ。聖ベネディクトも、最初の一つの運動に過ぎませんでした。その運動が教会の組織の中に組み入れられるのには、大きな困難と苦しみが必要でした。聖ベネディクト自身、自分が作った最初の修道院の原則を修正する必要に迫られました。これと同じように、現代にも聖霊はキリスト教的生活の新しい形態を私たちにお与えになります。限界のある人間によってなされることですから、当然そこから問題も生じます。

ということで、最初の原則はカリスマを消さないこと。たとえ煙たいものでも感謝して受け入れることです。二番目の原則はこれです。教会は一つであること。運動というものが、本当に聖霊からのものならば、教会の枠組の中にはまりこみ、教会に仕える。そして、教会の牧者と運動の推進者との

間に行われる辛抱強い対話から豊かな形態が生まれ、新しい要素が今日と明日の教会を建設する要素となるのです。

この対話はあらゆる段階を経て進みます。まず主任司祭、そして司教、そしてペトロの後継者。新しい運動に合った法的枠組みを探す対話です。多くの場合、その探求はすでに実を結びました。また別の場合は、いまだ検討中です。たとえば、新求道共同体の例があります。現在、この共同体は5年の試行期間の中にいますが、彼らの規約はこの5年後に最終的なものとして認可されるべきか、あるいはまだ試行期間を延ばす必要があるのか、あるいは現在の構造のいくらかの点を修正する必要があるのかどうかを見るところになっています。

いずれにしても、私は新求道共同体をその揺籃期から知っています。彼らは多くの問題を抱えながらも、すでに長い道のりを歩んできました。その問題にはまだ解決されていないものもありますが、我々はもう一つの新しい形態を発見しています。それは当局と彼らの間の関係をかなり良好にするものです。このようにしながら、私たちは前に進んでいきます。他の運動についても同じことです。

というわけで、二つの基本的な原則をまとめる形で、こう言いましょう。感謝し、忍耐し、必ず生じる苦しみを受容しよう、と。結婚生活にもいつも苦しみと緊張関係があるではありませんか。にもかかわらず、夫婦は前進し、そうして真の愛に成長していきます。教会共同体にも同じことが言えます。みな一緒に忍耐しましょう。また教会当局の異なるレベルの間に、主任司祭と司教と教皇の間で、絶えず意見の交換がなされ、最善の解決法を見出すために対話を進める心構えがなければなりません。主任司祭の経験は極めて重要ですが、司教の経験も、そして教皇の世界的視野も教会の中で司牧的神学的なそれなりの重要性を持っています。

まとめてみますと、一方で教会当局の異なるレベルの共同作業によって、他方、小教区で主に従いながら忍耐と開かれた心をもって諸運動の提示する現実を生きることによって、教会の新しい生命を育てていくことになるでしょう。

私たちは聖霊が下さるこれらの賜に感謝をしています。霊の聲に素直に耳を傾けながら、同時にこれらの新しい要素を教会の中に組み込む際にはっきりした見解を持ちましょう。この基準は結局のところ今日の教会に役立ちます。そのようにして、忍耐と勇気と寛大さをもって進めば、主は我々を助け導いて下さるに違いありません。

5、聖ジェラシオ教会の主任司祭は、司牧活動が霊的生活との一致の中で行われることの重要性に言及した。神父は、司牧活動はいかに教会を組織するかの技術ではなく、教会の生活そのものであると言い、神の民にこの司牧の本当の意味をいかに認識させるか、また司牧活動が第二バチカン公会議の教えた教会論にもっと沿う形で行うにはどうすればよいかと尋ねた。

いま神父様がされた質問は、二つに分けられると思います。一つは、いかにして小教区教会を公会議の教会論の中に生かすか、つまり信者たちにこの教会論を生きるようにさせるかで、もう一つは私たち自身がいかにして司牧の仕事を霊的なものにすることができるか、です。二番目の質問から始めましょう。私たちがどうしてもなくてはならない仕事を抱えながら、霊的な温度を保つことは、つねに多大の努力を要求します。聖アウグスチヌスにしてそうでした。彼は説教の中でこう嘆いています。先ほど話したことですが、聖人は自分は神の御言葉を黙想しながら生きingことを心底望んでいたが、朝から晩まであなたたちとともにいなければならない、と。しかしながら、アウグスチヌスはいつも人々のために奉仕する心構えを保ちつつ、祈りと神の御言葉の黙想のために時間を確保すること

によってこの問題を解決しました。と言うのは、もしそのような時間を確保しないなら、役に立つことは何もできないからです。私は神父様が仰った、司牧活動は単なる戦術でも行政の仕事でもなく、霊的な仕事でなければならないということを強調したいと思います。もちろん、そのどちらも欠けてはなりません。私たちはこの世界に住んでいるのであって、その限りに於いて、例えば、お金をどのように使うかなどの問題は存在し続けるからです。この種の問題もまったく無視してよい面ではありません。

強調されるべき点は、牧者であるということはそれ自体が霊的な行為であるということです。神父様はいみじくも、よき牧者について主が語られる聖ヨハネの福音書、第十章を引用されました。主は、牧者がもつべき最初の重要な特徴として、先に立って歩くと言われていました。すなわち、他の人々がすべきことをまず自分が先にするということです。牧者は先に歩む。このことは、牧者が自らまず神の御言葉を生きるということを意味します。すなわち牧者は、祈る人であり、赦す人であり、人々を受け容れる人、さらに祈りの行為として、また主との出会いの行為として秘跡を執行する人であるということです。また愛を生き実践する人でもなければなりません。このようになれば、彼のする対話や出会い、すべての行為はキリストとの一致の下に行われる霊的な行為となるでしょう。(略)

(略) 聖ヨハネの第十章は、この他にイエスが十字架でご自分をお捧げになることによって私たちの先を行かれると教えています。これは司祭にとっても避けることができません。この自分を捧げることは、キリストの十字架に参加することで、そのおかげで私たちが苦しむ人々を慰め、貧しい人々やそして疎外された人々などと一緒にいることができるようになります。

それゆえに、神父様が示されたこのプログラムにおいて、日々の司牧の仕事を霊的なものに変えることは決定的に重要なことです。それができるために、私たちは再び主のみ跡に従っていく必要があります。福音書は、主が昼のあいだ働いて夜になると山に籠もって御父と話された、すなわち祈られたと書いています。この点において私は自分の弱さを告白しなければなりません。夜になると私は祈ることができません。夜には眠りたいです。しかしながら、主のために少しの時間を割くことはできます。それはミサを捧げる時間、聖務日祷を祈る時間、たとえ短くても、黙想の時間、そして典礼とロザリオのための時間です。神の御言葉との個人的に対話することは重要です。そうしてのみ、沢山の司牧の仕事のために力を引き出すことができるからです。

第二点は、これまた適切にも神父様が指摘されたことですが、第二バチカン公会議の教会論の問題です。私たちはこの教会論の霊的な意味をもっともっと自分のものにしていかねばならないと思っています。公会議の教会論は「教会憲章」、「教会の宣教活動に関する教令」、そしてその他の短い文書、「神の啓示に関する教義憲章」などに見られますが、そのどれもまだまだその理解を深める余地が残されています。それを深めてこそ、私たちは信者たちにその魅力を理解させ、教会は単なる大規模な組織、世界に見られる様々な国際的組織の一つではなく、キリストの体であり、それゆえ聖パウロが言うように、霊的な体であると悟らせることができるでしょう。教会は霊的な組織です。教会は国境を越えた組織でも、あるいは行政組織や権力組織でもなく、また確かに社会的活動や国境を越えた活動にも携わるにしても、慈善団体でもないこと、そうではなく霊的な団体であることを人々に理解させることは、ことのほか重要なことだと思います。

この教会に関する見方を伝えねばなりません。その機会は、信者とともに祈るとき、一緒に神の御言葉に耳を傾けるとき、秘跡を執行するとき、愛徳の業においてキリストとともに行動するとき、そして、何よりも説教をするとき、です。この意味で説教というものは、私たちが信者に近づき、公会議が教えた霊性を伝えるために、またとないよい機会だと思います。もし説教が祈りに伴われ神の

御言葉を聞く中で成長していくなら、神の御言葉の内容を伝えるよい道具になるでしょう。こうして公会議の教えは真実に、つまりマスコミが伝えたような切り裂かれた形ではなく、公会議の本当の霊的姿を伝えられることでしょう。公会議の精神と教えをしっかりと身につけた上で、私たちは再び神の御言葉をいつも学ばねばなりません。そうするならば、私たちは信者に私たちの思いを伝え、司牧的で霊的な仕事を果たしていくことができるでしょう。

6、聖アナスタジア教会の主任司祭が、御聖体の永久礼拝について話し、聖体を汚す行為や悪魔信仰を償う行為の価値について教皇に質問した。

ご聖体の礼拝は、私たちの心にも信者の心にも深く根を張っていますので、ここでは一般的にそれについて話す必要はないと思います。神父様はたった今、聖体に関する償いという具体的な点を取り上げられました。償いの問題は、このごろ人々にとっては理解するのが難しくなっています。私が若いころ、み心の祝日にはレオ13世のあの美しい賛歌とピオ11世の賛歌を唱和していましたが、それらの祈りはすでにあの時代に汚聖の行為に対する償いが特別の地位を占めていたことを教えています。

この点を深めて、世の罪を償うために自分をお捧げになった主に至ることが重要だと思います。世の罪を償うとは、この人間世界での悪の量と善の量の間、平衡関係を打ち立てることと言えましょう。私たちは悪の量が善のそれを上回るままにしておくことはできません。少なくとも同じ量にまでは引き上げなくてはならないのです。こう考えるのは、結局キリストのなされたことを考える結果です。私の理解しているところでは、ミサの犠牲の意味はここにあります。この世界に存在し人々を打ちのめす悪の巨大な量に対して、主はそれ以上の善を生み出してくださいました。それが主がこの世にお示しになった無限の愛です。このことが重要な点です。すなわち、神はつねに絶対的な善ですが、この絶対的な善はなんと歴史の中に入ってくる。キリストはこの地上に姿をお現わしになり、悪を徹底的に経験されることによって、悪を相殺されると言う点です。もし感覚にだけ頼って見るならば、つねに存在する途方もない量のように見える悪は、神の御子の苦しみによって生まれたこれまた途方もない善によって、マイナスがプラスに変わったのです。

償いということが存在し、それが必要であるというのは、この意味においてです。今日こういうことを理解させるのは少々難しいと思われれます。この世界に見られる悪の重さに目を留めるなら、それは右肩上がりが増えていき善を埋め尽くし、私たちを絶望に陥れるような勢いに見えるように見えます。しかし、これを上回る善があるのです。それは、神ご自身がこの歴史に入り、人間の一人となれて、徹底的に苦しまれたことから生まれた善です。これが償いの意味です。この主の与えてくださった善を見ると、私たちは、微々たる力しかないにしても、この偉大な愛の善に協力をしてそれを示すように招かれていると感じることでしょう。私たちもこの善を必要としていることを知っています。なぜなら、私たちの中にも悪が存在するからです。私たちは一人残らず主の善のおかげで生きています。しかし、主がこの賜をお与えになるのは、コロサイ人への手紙で聖パウロが言うように、私たちもその満ちあふれる善に参与し、今自分が置かれている場所で、この豊かさをさらにいっそう増やすことができるようにするためなのです。

神学は、この償いということをよりよく理解できるように、まだまだ研究を深めていかねばなりません。過去の歴史の中で、償いについての誤った理解もありました。最近、私はナチアンツの聖グレゴリウスの神学書を読んでいます。その中で聖人はこのテーマについて触れ、こう自問しています。

「主はご自分の御血を誰にお捧げになったのか。」そしてこう続けます。「御父は御子の血を欲しておられなかった。御父は残酷なお方ではないから、それを御父の御旨に帰する必要はない。しかし、人類がそれを必要としていた。人類の罪のためにそれが必要であった。調和が破壊された世界に入り、その調和を回復することが必要であったのだ」と。この論理は償いの問題を解くために光を投げかけてくれます。しかし、それにしても、我々はまだこの事実をよく理解し、その後他の人々によく理解させることができるための十分説明できる言葉の仕方を知りません。神はご自分の御子の血をほしがるような残酷な神ではありません。しかし、神ご自身が、人類を愛するがために、歴史の中に入って苦しみ、調和を回復するためだけではなく、存在する膨大な悪を凌駕する善を生むことが必要なのです。そして主は、私たちにもこの事業に協力するように招かれるのです。

これは典型的なカトリックの教えです。ルターは言います、私たちは神の御業に何も付け加えることはできない、と。これは正しい。そして、ルターは更に言います。それゆえに私たちの業には何の価値もない、と。これは誤っています。と言うのは、主は寛大にも、私たちをしてご自分に協力するようにお招きになり、私たちの業に価値さえお与えになるのです。これらすべてのことを私たちは学びとるべきです。そして、主の偉大さと寛大さ、ならびに私たちの召し出しの偉大さを感じるべきです。主はご自分の無限の善に私たちをも結びつかけたく思われるのです。もし私たちがこのことを理解し始めるなら、主が私たちをこれに招いておいでになることを嬉しく思うでしょう。主が私たちをまじめに愛して下さることを感じて胸が躍ることでしょう。

7、教皇庁立のウルバノ大学で宣教学を教えながら、20世紀の新しい殉教者たちを記念する聖バルトロメオ大聖堂で司牧を担当している教授が、殉教者たちが人々に対し、なかでも若者に対してもつ模範の力と魅力について触れた。殉教者たちはキリスト教信仰の美しさをまざまざと見せつけ、希望に基づいた生活をしながら、悪に対して善で応えることが可能であることをこの世界に対して示している。この考察に対して教皇は何も付け加えることはないと言われた。

みんなの拍手を聞けば、神父様自身がすでに答えを示されたことがわかります。ですから、神父様のご質問には、単にその通り、神父様の言われるとおりですと答えましょう。そして、その考察を黙想することにしましょう。

8、現代文化の相対主義を前にして、ある助任司祭が教皇に信仰の一致と神学上の多元性との関係について一言述べて欲しいと頼んだ。

それはたいへん重要な質問です。私はまだ国際神学委員会のメンバーになるまえに、一年間グループでこの問題と取り組みました。私はその責任者だったので、かなりよく覚えています。とは言え、正直に言いますと、私はこの問題を簡単にまとめる自信はありません。ただ神学はいつも多様性に富んでいたとすることはできるでしょう。教父たちの時代、またフランシスコ会とドミニコ会の流れがあった中世、そして中世後期の神学を考えることで十分でしょう。先ほど言いましたように、神の言葉はつねに私たちの能力を凌駕します。そのためこの御言葉を理解し尽くすことは決してできません。色々な視点、色々な種類の考察が必要なのです。

簡単に次のことを言いたいと思います。神学者にとって重要なことは、自らのプロとしての責任と能力において、一方で現代世界の要求と挑戦に果敢に答えようとすると同時に、他方で神学のすべて

は教会の信仰に基づいているので、絶えず教会の信仰に戻る必要のあることを決して忘れないことです。神学者が個人として信仰に深く根ざして、自らの仕事が信仰についての考察にあることを理解しているなら、多様性と一致を両立させることができると思います。

9、最後の質問は、宗教芸術についてであった。信仰を伝える手段としてもっと評価してもよいかという質問である。

答えは極めて単純です。はい、です。この集会に少し遅刻したのは、実はその前にパウリーナ礼拝堂を訪れていたからです。その礼拝堂は何年も前から修復工事がなされているところで、完成するまでまだ2年かかるそうです。私は現場に組まれた足場の隙間から素晴らしい美術作品の一部を垣間見ることができました。それはきちんと修復するだけの価値があります。そうして再び輝きを取り戻し、生きた要理教育の教材となることを望んでいます。

この話しをしたのは、イタリアがこの種の芸術の宝庫であること、また芸術は汲み尽くすことのできない要理教育の貴重な教材であることを思い出させたかったからです。私たちにとって、宗教芸術を知り正しく理解することは義務でもあります。しかし、美術史の専門家が時々するように、芸術の技術的な面だけに拘泥するのではなく、それが表している内容に入り込み、その偉大な芸術に靈感を与えたモチーフにせまることです。これらの宝をまず知り、それらが表現しているすべてのものを生き生きした要理教育に変える能力を持つことは、本当に私たちに課せられた義務 将来の司祭を育てる教育においても と言えましょう。ときどき教会は何か抑圧的な団体とか強権的な組織であるかのように人々に理解させようとする人がありますが、宗教芸術についての理解を深めれば、教会がそのようなものではなく、歴史に表れた比類ない豊かな霊性をもつものとして示すことができるでしょう。宗教芸術も教会の生命力を表す印の一つです。教会は、その弱さと罪に邪魔されながらも、相変わらずこの豊かな芸術を生み続ける霊的な実体なのです。

それがために、私たちはこの宝の中に入り、この芸術を理解し説明できる者にならねばなりません。芸術とは、絵画や彫刻だけでなく、宗教音楽も含みます。宗教音楽は活性化されねばならない宗教芸術の一つです。福音は、それを生きる仕方は様々であるとは言え、今日でも芸術を生み出す力強い靈感を与えてくれます。今日でも、信仰と福音の豊かさは汲み尽くすことができないことを示すこの上なく美しい彫刻があります。またうっとりさせるような音楽も作曲されています。他方、がっかりさせるような芸術もあることにも言及せねばならないでしょう。いわば相反する芸術があると言える状況があるのです。今日でも教会は芸術に靈感を与えています。それは信仰と神の御言葉は無尽蔵の富を持っているからです。このことは私たち全員を勇気づけてくれます。未来の世界も信仰の新しい表現の仕方を創造するという確信と、同時にこの2000年の間に生まれたキリスト教芸術がいつもその若々しさを失うことなく、いつまでも「今日」の信仰を見せてくれるという希望を与えてくれます。

忍耐をもって耳を傾けてくださったことに感謝します。よい四旬節を過ごしてください。

“Documentos de Parabra” 30/ 2007, PALABRA 520-521, IV-2007